

1. 博士学位論文の審査の結果の要旨

(平成25年4月～平成26年3月)

| | |
|---------|---|
| 氏名 | 本間俊文 |
| 学位の種類 | 博士(文学) |
| 学位記番号 | 文博甲第66号 |
| 学位授与の日付 | 平成26年3月20日 |
| 学位授与の条件 | 学位規則第4条第3項 |
| 学位論文題目 | 初期日興門流史の研究 |
| 論文審査委員 | 主査教授 松村 壽 巖 副査教授 寺尾 英 智 副査 名誉教授 冠 賢 一 |

審査の結果の要旨

本論文は、日蓮聖人の直弟子・白蓮阿闍梨日興(1246-1333)を派祖として興された日興門流の初期段階(日興在世中～日興の直弟子・孫弟子の時代)における展開の様相を、布教・生活・交流といった歴史的観点から究明することを主たる研究課題とする。すなわち日興とその門弟が、師・日蓮聖人の思想と行動を如何に捉え、実践・継承しつつ門流の教線を拡張していったのか、その過程を初期日興門流関連史料を依拠として解明するものである。

本論文は、序章、本論五章、終章で構成している。

序章では、本研究の動機・問題の所在を提示し、考察対象とする先行研究を概観した上で、研究の観点と方法を明示する。

第一章「日興門流史概観」では、初期日興門流の展開について概観する。日興門流史は、建長五年(1253)に立教開宗を宣言された日蓮聖人に日興が出会い、入門したことを淵源とする。そして日興は、日蓮聖人の弟子として直参した時期を経て、日蓮聖人滅後は駿河を布教の拠点として自らの弟子を先導して教化活動を展開していく。さらに、日興滅後その門弟によってその教線が拡張されていくのである。本章では、第一節「門祖日興の生涯」と第二節「日興滅後における門流の展開」の二節を設け、日興を門祖とする初期日興門流がどのように形成され、どのように発展・展開していくのか、その変遷を最新の研究成果を踏まえながら辿っていく。

第二章「日興門流における曼荼羅本尊の継承」では、日蓮聖人が法華経の壮大な世界とその真髓を具現化して揮毫した曼荼羅本尊を、日興とその弟子が教化活動の中でどのように位置づけ、継承したかについて考察する。本章は全体を三節に分けて考察する。第一節『白蓮弟子分与申御筆御本尊目録事』（『弟子分本尊目録』）について」では、日興が永仁六年（1298）にまとめた『弟子分本尊目録』の記述に着目し、日興門流初期における日蓮聖人曼荼羅本尊の受容の在り方と、当時の弟子檀越の実態について検討する。第二節「日興の曼荼羅本尊書写」では、日興が生涯を通して書写した三〇〇幅超の曼荼羅本尊とその授与書等に着目し、日興における曼荼羅本尊書写・授与の意義と、そこから見えてくる当時の門流の広がりについて検討する。第三節「門弟による曼荼羅本尊の受容と書写」では、日興の門弟による曼荼羅本尊書写の実態と、日興が書写した曼荼羅本尊の伝承の在り方について、授与書等を中心に検討する。

本考察を通して、日蓮聖人が図顕した曼荼羅本尊の書写と授与が、日興門流において重要な教化活動の一つとして捉えられていた様子が窺える。特に日興は三〇〇幅を超す多数の曼荼羅本尊を書写して弟子檀越に授与しているが、その目的は弟子の証として、礼拝の対象と為すためであったと考えられる。それは日興門下であることを明確にし、自門の独自性と確立化を目指す意識が日興に強くあったものと想定される。そして、日興滅後も門弟によって日興の遺志は受け継がれ、曼荼羅本尊の書写と授与が継承されていくのである。これらの曼荼羅本尊書写・授与の事実は、初期日興門流の中で、日蓮聖人の教えを忠実に受容し法華本門の思想を末代に弘め遺すための重要な法門として曼荼羅本尊が位置づけられていたことを、如実に物語っている。

また、曼荼羅本尊に記される授与書によって、当時の日興門流の教線が駿河・甲斐・陸奥を中心に広域に伸張していることが看取できる。既に高木豊氏が指摘しているように、日興門流の教化が血縁・族縁関係者を通して行われたことが、日興門流初期における教線の広域化と定着化を促進させたことを検証している。さらに本章では、論者が新たに確認した新出日興曼荼羅本尊四幅の検討を加え、それを収録している。

第三章「日興門流における諫暁活動の展開」では、日蓮聖人によってなされた、権力者に対して宗教者が信仰的な誤りを指摘して諭す行為である諫暁活動が、日興門流においてどのように継承・展開されたか、その具体的様相を探る。特に諸師が諫暁活動の際に権力者に提出した申状を中心史料として、考察を進める。本章は三節からなる。第一節「中世日蓮教団の諫暁活動」では、日興門流の諫暁活動を検討する前段階として、日蓮聖人滅後の中世日蓮教団における諫暁活動の全容を確認し、諸門流による諫暁活動の実態と展開について考察する。第二節「日興在世中における日興門流の諫暁活動」では、日興在世中に行われた日興と

その門弟による諫暁活動について考察する。日興が作成した申状の書式や申状に副えて提出した副進書に着目し、日蓮聖人の直弟子である日興がどのような手段・主張のもとに諫暁活動を果たしたのか、また門祖としての立場から、門弟に対してどのように諫暁活動を指揮したのか、などを検討する。第三節「日興滅後における日興門流の諫暁活動」では、日興滅後の門弟による諫暁活動の展開について考察する。申状の内容や書式・副進書の継承の在り方を通して、門弟による諫暁活動の実態とその特色を検討する。

本考察を通して、諫暁活動の事跡は日蓮聖人滅後の中世日蓮教団諸門流に共通して見られ、その中でも日興門流の諫暁活動は、特に多く確認することができる。すなわち、国主教化が初期日興門流の教化活動における大きな目標の一つであったことを明確に物語っている。日興門流諸師の申状には、爾前迹門の謗法を対治して速やかに法華経本門の教法を信奉せよとの要請がほぼ共通して記されている。この要請こそが諫暁活動の根本主張であり、また本勝迹劣義を明示する点が、日興門流の申状における特色と言えよう。日興を始めとする日興門流諸師が諫暁活動を展開した背景には、末法における法華経弘通の使命を託された本化上行菩薩の応現としての自覚に立たれた日蓮聖人の法脈に連なる弟子であるという自負心と使命感が存在したことが、諸師申状から明確に読み取ることができる。このような度重なる諫暁活動の事跡から、日蓮聖人が目指された立正安国の理想世界実現という遺志が、日興門流の中で受け継がれていく様子を検証している。

第四章「日興と弟子檀越の交流」では、日興在世中における日興と弟子檀越との関わり方について考察する。本章は、次の二つの視点から検討を試みる。第一節「日興とその門弟の往来」では、日興および門弟の文書に散見される往来の記述に着目し、初期日興門流内でどのような目的の往来が行われ、その往来が生活や布教活動とどのように結びついたのかを考察する。第二節「日興門流における物品の授受について」では、日興文書に頻出する布施・供養品をはじめとする物品授受の記述に着目する。そして、贈与物と贈与者との関係や年中行事・仏事における物品授受の記録から、日興在世中の生活状況や文化の一端を探ると共に、日興と弟子檀越の間でどのような生活的支援がなされていたのかを検討する。

本考察によって、日興の門弟が各地に赴いて布教を展開したことが、陸奥の信徒による富士参詣といった慣習化した信仰活動を生み出すに至り、結果的に門流の教線拡大へとつながっていった様子が窺える。その一方で、日興自身は重須移住後はほぼ当地に留まっていたようであり、門下教育等に専念していたものと想定される。また、贈答品への依存度が非常に高かったとされる中世社会の中で、日興と弟子檀越もまた年中行事や仏事を機に頻繁に物品の授受を行い、それが結果として互いの生活の支えとなっていた様子も確認できる。このように、日興門流周辺における当時の具体的な行動と人間関係の一端を垣間見ることができる。

第五章「日興門流史における諸課題」では、初期日興門流史において史料不足等の理由から解明されていない課題点について考察を試みる。本章においては、次の二つの課題点を取り上げる。第一節「日興書状にみえる「六郎入道」について一波木井実長との同異をめぐって」では、日興から書状を三通宛られている「六郎入道」という檀越についてである。この六郎入道は従来日蓮聖人身延入山時の領主・波木井実長かと推定されてきたが、未だそれを裏付ける明確な根拠は見出されていない。本節では、果たして六郎入道が波木井実長と同人なのか、あるいは別人なのかを種々の視座から検討する。第二節「徳治二年の法難について」では、日興在世中の徳治二年（1307）に日興門下の周辺において発生した「徳治二年の法難」についてである。当法難は熱原法難と同様に宗教的弾圧事件と想定されるものであるが、その全容もまた解明されていない。ここでは、法難に関連する史料を改めて整理分析し、法難に対する日興門下の対応と法難の動向について検討する。

考察の結果、六郎入道に関しては、従来の「六郎入道＝波木井実長」説を肯定する積極的な根拠を見出せない一方で、新たな見解として、陸奥の武士で三戸新給人・岩沢大炊六郎入道という人物に比定できる可能性が考えられる。また、徳治二年の法難に関しては、従来関連史料の年代順序が不明であるが故に法難の断片的な状況しか把握できなかったが、それらを再検討し、法難の推移について新たな推論を提示している。しかし、両課題とも現状では多くの課題点が残存したのも事実であり、本考察を足掛かりとして、今後さらなる検討が必要である。

終章は、以上の研究の結論である。本論文を通して、日蓮聖人の入滅により弟子の立場が求法者から弘法者へと変化する日蓮教団最初の転換期の中で、如何に日興とその門弟が師・日蓮聖人の思想と行動を受容しつつ自門の教線拡大を果たしたのか、という初期日興門流の原初の動向を探ってきた。そこには、生涯を通して日蓮聖人に直参する姿勢を身をもって示した直弟子・日興の姿があり、日興が体現した門下の進むべき方向性を基軸として、初期日興門流が展開していく様相をはっきりと窺い知ることができる、と結論づけている。

なお、本論文の審査に際しては、文学研究科の内規により、平成26年1月31日に公聴口頭試問を行い、論者の研究の向学とその力量の確実なることを確認した。

よって、本論文は博士（文学）の学位を授与するに相応すると審査委員会は判断し、これを認定する。